ミカエル三世と「従者団」

——九世紀中盤ビザンツ帝国の皇帝と支配構造——

小林　功

【要約】ドイツのビザンツ研究者である H.-G.Beck は、ビザンツ帝国の社会の特色を説明するにあたって社会的流動性の高さを重要なファクターとして考え、「従者団」という概念を導入して説明を行なった。それに対して本稿では始めに、Beck がその例としてあげた九世紀中盤の皇帝、ミカエル三世の「従者団」について分析し、「従者団」が実際には社会的上昇の手段としては利用されてはおらず、その成員はミカエル三世と共に政治の実務を行なっていた高官たちであったことを明らかにした。

事実ミカエル三世の時代には、ビザンツ帝国を取り巻く状況の変化に伴なって中央行政機構の中枢にいた高官たちがきわめて大きな政治的発言力を有するようになっていた。それゆえ本稿ではさらに、ミカエル三世時代はこのような状況下でいかにして自らの政治的裁量権を確保したかを考察した。ミカエル三世の「従者団」は高官に対して発言力を獲得するためのミカエル三世の対策の一環だったのである。

史林　七八巻二号　一九九五年三月

一　はじめに

ビザンツ帝国皇帝ミカエル三世(在位八四二～八六七年)が暗殺されたのは、八六七年九月二三日の深夜であった。ミカエルはコンスタンティノープル郊外の聖ママス離宮で泥酔して寝ていたところを襲われたのである。皇帝を暗殺したのは共同皇帝の地位にあったバシレイオスと、その配下の者たちであった。ミカエル三世を暗殺したバシレイオスは、バシレイオス一世(在位八六七～八八六年)として単独統治を開始するのである。

暗殺されたミカエル三世は従来、あまり評価の高くない皇帝であった。その評価の源となったのは一〇世紀の『続テオファネス年代記』[1]である。そこではミカエル三世は政治を省みることなく飲酒や競馬などの快楽に溺れた皇帝とされている。今世紀になってから R. J. H. Jenkins によって、『続テオファネス年代記』の描写にはミカエル三世をおとしめる政治的目的があったこと(後述)が明らかにされたが、それによってミカエル三世の政治的手腕が高く評価されるようになったわけではない。G. Ostrogorsky のように、「彼(ミカエル三世)は偉大な人物ではなかったが、彼の時代は偉大であった」[2]として、政治の実務にはあまり興味を持たなかった人物と見なす評価が今なお一般的である。[3]

しかし、このような評価は果たしてミカエル三世の真実の姿を示しているのであろうか。従来、ミカエル三世時代の研究はいわゆる「フォティオスのシスマ」に代表される、ブルガリアの改宗問題とそれに関係するローマ教会との関係や、[4]ミカエル三世時代以降本格化する古典文化の復興に関する研究が大半を占めており、[5]ミカエル三世時代の政治史については研究の蓄積がきわめて少ないと言わざるをえない。本稿では、ミカエル三世時代の政治がどのように遂行されていたのか、そして皇帝であるミカエル三世は、政治の遂行にあたってどのような位置を占めていたのか、について考察を加えていく。

ミカエル三世の政治遂行について考察していくにあたって、看過することのできないのは H.-G. Beck の業績である。Beck はよく知られているようにビザンツ帝国の国制について独創的な見解を発表している研究者であるが、[6]それとの関連でビザンツ帝国の社会・政治構造についても検討を加えている。[7]そしてその際に彼が詳しく論じたのがミカエル三世とバシレイオス一世についてなのである。それゆえ Beck の見解を以下簡単に紹介していきたい。

Beck によると、ビザンツ帝国の社会において首都のコンスタンティノープルが占めていた重要性はきわめて巨大なものであり、そこでは上昇・下降の活発な社会流動が存在していたため、確固たる支配層といったものは成立しなかった。[8]このような活発な社会流動が存在した要因として Beck が主張したのが「従者団」である。「従者団」とは一言で定義す

れば、皇帝や有力者に私的に結びついた社会的結合、ということになろう。「従者団」にはどんな出自の者であっても、頑健さや美貌などの何か秀でた特徴があれば、誰でも参加できた。「従者」は官位や爵位を持たず、国家の行政機構の外部に位置していた。そして有能であれば「従者団」の持っている結合を利用して急速な社会的上昇を行ない、自ら有力者や皇帝になることも可能だったという。また、主人である皇帝や有力者達にとっては、「従者団」は「統治機構外の統治手段」だった。つまり「従者団」は、正式の統治機構たる官僚制を利用するのに適さない場合に、皇帝や有力者の政治的突撃隊として活用された。特に皇帝選挙が行なわれる際には「従者団」は、候補者の党派の中核として、政治的・軍事的潜在力となったのである。そしてミカエル三世やバシレイオスもこうした自らの「従者団」を保持しており、ミカエル三世を暗殺したのもバシレイオスの「従者団」たちであった。[9]

また、有力者が皇帝位に就いた後も「従者団」と皇帝との関係が終結したのではなかった。整備された官僚制が存在していたビザンツ帝国においては、官僚制は皇帝の行動を制約する要因にもなったため、皇帝は官僚制を制御するために「従者団」を活用した。ミカエル三世の「従者団」もそういった目的のためにも利用されていた。[10]

要約するとBeckの主張は以下のようになろう。すなわち、ビザンツ帝国では上下の社会的流動性がきわめて高かった。有力者たちは自己の周囲に出自とは無関係のパトロン関係＝「従者団」を形成した。そしてそれを利用して皇帝位を目指した。そして帝位の交代の都度、支配層の入れ替えが起き、その結果大規模な社会の上昇・下降の流動が起きた。それゆえビザンツ帝国には安定した支配層は存在できなかった。しかし国家運営に不可欠な官僚制は存続し、時には皇帝権力遂行の支障となっていた。それゆえ皇帝は裁量権確保のために、「従者団」を利用して官僚たちを牽制した。そしてミカエル三世やバシレイオス一世は、こうした「従者団」を活用しつつ政治や政争を行なっていた。[11]

こうしたBeckの主張は、以降のビザンツ帝国史研究に大きな影響を与え、ビザンツ社会の流動性がきわめて高く、階級としての支配層が存在していなかったという見解は、半ば定説化したのである。[12] しかしながらこうしたBeckの見

解には、いくつかの問題点が存在している。第一の問題点は、Beck の主張するような「従者団」が、実際に皇帝や有力者が政治に参画するにあたってどのような役割を果たしていたかが不分明なことである。特に、実際に政治を執行していた官僚たちに対して、皇帝が「従者団」をどのように利用していたのかが、明確には述べられていない。

第二に、社会的上昇の問題があげられる。「従者団」に加盟して皇帝や有力者の信任を受け、彼らの背後で大きな影響力を行使することができたとして、果たしてそれを「社会的上昇」と見なすことができるのであろうか。また当時の人々がそれを「社会的上昇」と見なしていたのであろうか。さらにそもそも、「従者団」を利用しての社会的上昇が可能だったのか、また「従者団」なるものが本当に存在していたのかということも、当然問題とすべきことである。

ミカエル三世、バシレイオス一世が生きた九世紀という時代に対しての Beck の視角についても注意しなければならない。Beck はビザンツの国制史研究に大きな足跡を残した研究者である。しかし彼の国制史論は「静態的な」[13]色彩の強いものであり、ビザンツ帝国一一〇〇年の歴史の中での普遍的な要素の検討に関心があるように観ぜられる。それゆえミカエル三世やバシレイオス一世に特有の政治状況や社会状況と言ったことにはほとんど関心が向けられてはいない。しかしながらミカエルやバシレイオスが生きた九世紀後半という時代は、七〜八世紀に存亡の危機に立たされたビザンツ帝国が、守勢から攻勢に転じる時代である。また社会的にも文化的にも大きな変化を経験する時代である。それゆえ「従者団」に関する Beck の議論についても、九世紀の社会や政治状況を踏まえた上での再検討が必要である。しかしながら Beck 以降も、ミカエル三世時代のビザンツ帝国の社会構造や政治構造についての研究はあまり活発なものとはならなかった。

しかし近年、九世紀のビザンツ帝国の支配構造や社会構造に関係する研究も公にされるようになってきている。そしてそれらの中でも F. Winkelmann の著作は、[14]膨大な資料に基づいた八〜九世紀の「支配層」についてのプロソポグラフィー的研究として特記すべきものであり、ミカエル三世・バシレイオス一世時代の政治状況や社会状況を分析していく上で

もきわめて有効な視角を我々に提供している。ただ彼の研究は資料に基づいた着実な基礎研究という段階にとどまっており、支配構造についての彼なりの独自な見解を打ち出すには至っていない。また Winkelmann の著作を含めて、近年の研究においても九世紀のビザンツ帝国における大きな社会的変化、といった観点は希薄であるように思われ、その結果九世紀、そしてさらにはミカエルやバシレイオスの時代がどのような時期であったか、明確な像を描くことには成功していない。

そこで本稿では Beck と Winkelmann の研究を出発点として、九世紀中盤、ミカエル三世・バシレイオス一世の時代のビザンツ帝国の支配構造や社会構造がいかなるものであったかを明らかにしていきたい。本稿で主に問題となる点を提示すると次の二点となる。

① ミカエル三世の時代、実際に「従者団」は存在していたのか、また「従者団」が社会的上昇の機会となっていたのか。

② ミカエル三世は実際に政務を行なうにあたって、どのような勢力とどのような関係を構築していたのか。

こうした点について考察を重ねることによって、ミカエル三世の時代のビザンツ帝国がどのような状況のもとにあったのか、その一端を明らかにしていくことが可能となろう。またさらに、大きな社会的変化を経験した九世紀のビザンツ帝国の支配構造・社会構造の長期的なダイナミクスについて、筆者なりの見通しを得ることも可能になるであろう。

① Theophanes Continuatus, *Chronographia*, ed. I. Bekker, Bonn, 1838.（以下、ThC と略）

② G. Ostrogorsky, *History of the Byzantine State*, New Brunswick, 1969, p. 223.

③ "ミカエル三世像の変化については、E. Kislinger, "Michael III-Image and Realität-", *Eos* 75 (1987), S. 389-400. 参照。

④ cf. F. Dvornik, *The Photian Schism: History and Legend*, Cambridge, 1948.

⑤ 藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』、南窓社、一九九三年。

⑥ Beck の業績については、さしあたって渡辺金一「ビザンツにおけるイデオロギーと社会的現実—H・G・ベックの若干の研究に寄せて—」、H・G・ベック、渡辺金一訳、『ビザンツ世界の思考構造—文

学創造の根底にあるもの—』、岩波書店、一九七八年所収、を参照のこと。

⑦ H.-G. Beck, „Byzantinische Gefolgschaftswesen", *Bayer. Akademie der Wissensch. Phil.-Hist. Kl. Sitzungsberichte 1965*, S. 1-32.(以下、Beck, Gefolgschaftswesen と略) id, „Konstantinopel. Zur Sozialgeschichte einer frühmittelalterlichen Hauptstadt", *BZ 58* (1965), S. 11-45.

⑧ Beck, op. cit., S. 11-14.

⑨ Beck, Gefolgschaftswesen, S. 12, 14-16, 30.

⑩ ibid, S. 30-32.

⑪ こうした Beck の見解は、渡辺金一氏によって我が国にも詳しく紹介されている。渡辺金一『コンスタンティノープル千年—革命劇場—』、岩波新書、一九八五年、第六章「社会的流動性」。

⑫ cf. H. Köpstein, „Zur sozialen Struktur und Dynamik im frühen Byzanz. Forschungsstand-Problem", F. Winkelmann (hrsg.), *Volk und Herrschaft im frühen Byzanz: Methodische und quellenkritische Probleme*, Berlin, 1991, S. 49-69.

⑬ cf. 井上浩一「ビザンツ帝国の国制と社会」、鈴木正幸他編『比較国制史研究序説』、柏書房、一九九二年所収。

⑭ F. Winkelmann, *Quellenstudien zur herrschenden Klasse von Byzanz im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1987.(以下、Winkelmann と略)

二 「従者団」の分析

具体的な考察の前に、ミカエル三世とはどのような皇帝であったのか、簡単な評伝を付しておきたい。父のテオフィロス(在位八二九～八四二年)が没して、ミカエル三世が即位した八四二年には、彼はまだ二歳だった。[1] そのため母親のテオドラが摂政となり、側近でロゴテテース・トゥー・ドゥロムー(通信・外務長官)だったテオクティストスと共に政治を行なった。しかしテオクティストスと、テオドラの弟のバルダスが次第に対立していく。八五五年にバルダスはテオクティストスを暗殺して政治の実権を握った。そして八六二年にはカイサル(副帝)にまで昇進する。しかし八六六年に、ミカエル三世の側近で当時パラコイモメノス(寝室管理長官)であったバシレイオスによって暗殺される。同年にバシレイオスは共同皇帝に任命され、ついで翌八六七年にはミカエル三世をも暗殺して、単独統治を開始する。

ミカエル三世は『続テオファネス年代記』や『ゲネシオス年代記』[2]など、一〇世紀に編纂された年代記などでは、政治を全く省みない暗君として描写されている。しかしこれらの年代記が、バシレイオス一世の孫のコンスタンティノス七世

ポルフュロゲネトス（在位九一三～九五九年）の命によって編纂されたため、祖父バシレイオス一世の犯罪を正当化するべくミカエル三世を暗君に仕立てあげていることが既に Jenkins によって指摘されている。[3] そのため本稿では、『続テオファネス年代記』や『ゲネシオス年代記』のほか、同じく一〇世紀に編纂されたもののコンスタンティノス七世の影響を受けておらず、記述にも比較的信用のおける『シュメオン年代記』[4]をも主資料とし、さらに『続テオファネス年代記』や『シュメオン年代記』をもとに一〇世紀に編まれた『偽シュメオン年代記』[5]や聖人伝、印章資料[6]などをも活用しつつ考察を進めていくことにする。

(a) ミカエル三世の「従者団」

Beck がミカエル三世の「従者団」のメンバーと見なしている人々は、『続テオファネス年代記』において頻繁に言及される。先述したように、『続テオファネス年代記』はミカエル三世を暗君として描写しているため、彼の「従者団」のメンバーもきわめて悪辣な人物たちとして描写されている。本節では、個々の「従者」たちを分析していき、彼らがいかなる人物だったのか考察していく。

最初に取り上げるのはヒメリオスである。彼は『続テオファネス年代記』においてはきわめて下品に描写されている。[7] しかし同じ『続テオファネス年代記』において、彼がパトリキオスという、きわめて高い爵位を持った人物とされていることは注目に値する。[8] 爵位を持っていた人物が必ずしも官位を持っていたわけではないものの、一般的に爵位と官位は対応関係にあった。それゆえ

表　9世紀中盤の爵位序列

カイサル	*καῖσαρ*	
ノベリッシモス	*νωβελίσσιμος*	
クロパラテス	*κουροπαλάτης*	
ゾステ・パトリキア	*ζωστὴ πατρικία*（女性の爵位）	
マギストロス	*μάγιστρος*	
アンテュパトス	*ἀνθύπατος*	
パトリキオス	*πατρίκιος*	
プロトスパタリオス	*πρωτοσπαθάριος*	
ディシュパトス	*δισύπατος*	
スパタロカンディダトス	*σπαθαροκανδιδᾶτος*	
スパタリオス	*σπαθάριος*	
ヒュパトス	*ὕπατος*	
ストラトル	*στράτωρ*	（以下省略）

ヒメリオスが中央行政機構内で高い官位を保持していた可能性は高い。またミカエル三世死後の八六九／七〇年に開催されたコンスタンティノープル第四宗教会議に、政府代表の一人として出席しているアンテュパトスの爵位を持つヒメリオスが、彼と同一人物と思われる。[9] ここからも、ヒメリオスが中央行政機構内で重要な地位を占めていたことが看取できる。要するに彼はミカエル三世の没後も政府の有力者としての地位を維持していたのである。Winkelmann は彼について、ミカエルからバシレイオスの支持者に変わった、あるいは地位の高さゆえにバシレイオス一世も手が出せなかった、の二つの可能性を指摘している。[10] いずれにせよ、彼は政府内の有力者であって、国家の統治機構内で重要な地位を占めていたことは明らかである。

第二に、ケイラスとクラサスがあげられる。彼らは『続テオファネス年代記』によると、

(競馬の際に、) 皇帝は青組で出馬した。また緑組からはパトリキオスでロゴテテース・トゥー・ドゥロムーとなったトマスの父のコンスタンティノス (・マニアケス) が、白組からはケイラス、赤組からはクラサスが出馬した。彼らは一方はプロトアセクレティスの、またもう一方はドゥロモスのプロトノタリオスの職務に専念せず、一人は青組の、またもう一人は緑組のコンビノグラフォス (競馬開催書を書く役人) と化していた。[11]

とある。プロトアセクレティスは尚書局の長官で、中央行政機構の要職である。またドゥロモスのプロトノタリオスも同様に中央行政機構の要職である。それゆえ J. B. Bury の考えるように、彼らは皇帝と私的に競馬を楽しんでいた高官たちだったと考えられる。[12]

なお、『シュメオン年代記』にもほぼ同様の記述があり、そこではケイラスに代わってアガリアノスが言及される。[13] P. Karlin-Hayter が示唆するように、ケイラスとはアガリアノスのあだ名だった可能性も否定できない。[14]

第三にあげられるのはグリュロスである。彼は『続テオファネス年代記』によると、ミカエル三世によって総大主教に「任命」され、仲間と共に典礼のパロディーなどを行って本当の総大主教であるイグナティオスを馬鹿にしていたという。[15]

しかし彼については『偽シュメオン年代記』や一〇世紀に編纂された『イグナティオス伝』から、グリュロスというのはあだ名で本名はテオフィロス、プロトスパタリオスの爵位を持っていたことがわかる。さらにコンスタンティノープル第四宗教会議のカノンからも、彼が政府の高官だったこと、またバシレイオス一世時代にもプロトスパタリオスの地位を維持していたことが看取できる。[16]

また、グリュロスと共にイグナティオスを馬鹿にした人々も同じカノンで何人か言及される。そうした人々もみなスパタリオスやスパタロカンディダトスなどの中位の爵位を持った人々である。彼らもケイラスやクラサスと同様、中堅官僚だったと考えられる。[17]

第四に、バシリキノス（バシリスキアノス）をあげることができる。彼は『続テオファネス年代記』によると、「犯罪者集団の一人で、取るに足らない女々しい宴会好きの男」[18]だった。しかし同時に『続テオファネス年代記』には、彼の兄弟のコンスタンティノス・カプノゲネスがコンスタンティノープル市長官だったことが記述されている。[19]また『シュメオン年代記』によると、彼はパトリキオスであった。[20]こうしたことから、彼もまた政府内で高い地位を持った人物だったことがわかる。ミカエル三世時代のプロソポグラフィー研究を行なった R. Guilland も、彼が上流階級の出であったと理解している。[21]

最後に、コンスタンティノス・マニアケスをあげることができる。彼は『ゲネシオス年代記』によると、テオフィロス時代にアルメニアから人質としてコンスタンティノープルにやって来て、ドゥルンガリオス・テース・ビグラス（宮廷護衛長官）に任命された。そして『シュメオン年代記』から、ミカエル三世時代末期までこの職を務めていたことが看取できる。[22]また注目すべきは彼の行動である。彼は八四三年のイコン崇拝復活に強硬に反対した人物である。また八五五年のテオクティストス暗殺時にはテオクティストスの救出を試みている。[23]このような、失脚の危険がきわめて高い政治的行動を行なっているにもかかわらず、彼が失脚することはなかった。また子孫も一〇世紀に至るまで繁栄した。[24]

彼らの経歴から、我々は Beck が考えていたのとは異なった「従者団」像を獲得することになる。彼らはみな高い官位や爵位を持っていた人々であり、中央行政機構の要職に就いていた、いわば官僚層の頂点に立っていた人々が多い。すなわち彼らが「統治機構の外部」に位置していたとは言い難いのである。また社会的流動性が高かったという証拠を彼らの経歴からうかがうこともできない。

彼らはミカエル三世の近くにいて、皇帝と官職を越えた親交を深めていたことが看取できる。彼らはケイラスやクラサス、ヒメリオスのように、皇帝の私的な競馬や酒宴に参加したりしている。また私的な行動のみならずグリュロスによる総大主教のイグナティオスへの誹謗行動[26]のように、明らかに政治的目的を持った活動の際に、集団となって活動していることもわかる。彼らはバラバラにミカエル三世と結びついていたのではなく、一定のまとまりを持った集団だったのである。

ミカエル三世が政治の実務を行なうにあたって、彼らを特に利用していたことは、グリュロスの例からうかがえる。史料からはそれ以上明確にはできないものの、ミカエルは他の政治の問題についても、彼らと協議を行なったり、彼らに彼別に任務を与えて利用していたであろう。Karlin-Hayter が考えるように、彼らはミカエル三世の側近を形成していた高官の集団だったと考える[27]ほうが、実態に即しているのである。すなわち彼らはミカエル三世の周囲にいて、政治の遂行にあたっていた。ミカエルは彼らと協議を行い、かつ登用していたのである。それは時には彼らの元来の役職からは逸脱した任務となることもあった。その点では Beck の主張する「従者団」の性格と通じるものを持っているが、しかし彼らは国家機構から完全に逸脱した存在ではなく、逆に国家機構の中枢に位置する存在だったのである。

彼らの大半がバシレイオス一世時代になってもその地位を維持しており、政権交代が大きく影響を与えた形跡がないことも注目に値する。政権交代による支配層の大幅な入れ替えが起きたとは考えられない。社会の大規模な流動が起きたとは考えられないのである。

(b) バシレイオスと「従者団」

前節での考察から、ミカエル三世の「従者団」が Beck の考えるような、統治機構の外部に位置する社会的結合ではないことが明らかになった。しかしながらミカエル三世の「従者団」のみを取り上げて Beck の主張を退けることはできない。特に前節では、Beck がその論拠を構築するにあたって最大の例としたバシレイオスについては何の考察をも加えていない。Beck によると、バシレイオスは貧農の家に生まれ、若くして首都へ出て始めミカエル三世の一族のテオフィリッツェスの、次いでミカエル三世の「従者団」に加盟して、団内での地位を急上昇させていった。そしてミカエル三世の「従者団」に所属する一方で、自らの「従者団」をも形成し、その助力を得て皇帝位を獲得したという。[27]

しかし、ミカエル三世の「従者団」が、前節で考察したようにその存在に疑問が残るため、「従者団」を利用してのバシレイオスの社会的上昇、という Beck の所説の再検討は不可避である。またさらにバシレイオスが実際に自らの「従者団」を保持していたかについても検討が必要である。

それゆえ本節では、始めにバシレイオスの経歴を分析して、彼の社会的上昇が、実際にはどのようにして行なわれたかについて検討する。そして次にバシレイオスの「従者団」の成員についても検討を加え、バシレイオスの「従者団」が社会的上昇の機会となっていたのか、またさらにバシレイオスが実際に「従者団」を保持していたのかについても考察していく。

バシレイオスの経歴については、『続テオファネス年代記』や『シュメオン年代記』などから詳細に知ることができる。それらによると、バシレイオスはテマ・マケドニアの中心都市であるアドリアノープルの近郊の農家の出身である。[28] 彼の両親は九世紀前半にブルガリア軍によって連行され、二〇年ほどドナウ北岸で過ごした後、八三六年頃にビザンツ国内に帰還して来た。その際テマ・マケドニアに国家から土地を支給されたと考えられ、実際『続テオファネス年代記』においても、バシレイオスの両親は使用人を利用できる程度の土地を持っていたと描写されている。[29] それゆえバシレイオスの実

家を貧農と考えることには無理がある。

バシレイオスは成人すると始めに、マケドニアのストラテーゴスだったツァンツェスに仕える。[30] 注目すべきはこのツァンツェスが、ドナウ北岸に連行されていたビザンツ人たちの指導者の一人だったことである。[31] また、後にバシレイオスが単独皇帝となると、ツァンツェスの一族（恐らく息子）であるステュリアノス・ザウーツェスが側近として活躍している。[32] 資料からこれ以上明らかにはし得ないものの、バシレイオスの一族とツァンツェスの間には、以前から何らかの人間関係があった可能性が高い。

バシレイオスはすぐにツァンツェスのもとを去って、コンスタンティノープルへ出ることになる。史料は一致して、彼がコンスタンティノープルの城壁近くにあった修道院の修道士だったニコラオス・アンドロサリテスの口利きで、当時コメス・トーン・テイケオーン（城壁防衛長官）だったテオフィリッツェスに仕えることになったとしている。[33] さらに『続テオファネス年代記』や『ゲネシオス年代記』によると、バシレイオスはコンスタンティノープルに出て来た当初から、コンスタンティノス・マニアケス（四六頁参照）と親交を持っていたといい、その理由について『続テオファネス年代記』は「彼自身もアルメニアに由来する一族だったから」[34] としている。バシレイオスやコンスタンティノス・マニアケスのみならず、ツァンツェスやテオフィリッツェスがアルメニア系の人物だったことをも考えあわせると、彼らの間にはアルメニア系という共通点で結ばれた、何らかのネットワークが形成されていたと推測することもできる。さらにバシレイオスの一族が、こういった国家機構の要職に就いている人々と関係を持っていたことも看取できる。

ダネリス未亡人との関係もバシレイオスの出自を知る手掛かりとなる。『続テオファネス年代記』によると、バシレイオスはテオフィリッツェスと共にテマ・ペロポンネソスのパトラスという町に赴いた際、かの地の大富豪だったダネリス未亡人から多額の贈与を受けている。[35] バシレイオスがパトラスに赴いたのは、テオフィリッツェスに仕えるようになった直後である。[36] 仮にバシレイオスが貧農出身だったとすると、このような時期に地方の大富豪がバシレイオスに多額の贈与

を行なうとは考えにくい。コンスタンティノープルに出て来る以前から、バシレイオスが中央の有力者たちと何らかの親密な人間関係を持っており、ダネリス未亡人が自らの中央の代弁者としてバシレイオスと親密な関係を結ぼうとしたと考えなければ、ダネリス未亡人の贈与の理由を説明することはできない。いみじくも Jenkins が述べているように、バシレイオスは「よく世話されて」いて、「運を試すということはなかった」[37]のである。

テオフィリッツェスに一年あまり仕えた後、バシレイオスはテオフィリッツェスの推薦によってミカエル三世のヘタイレイアに編入される。[38] Beck はヘタイレイアを、前節で検討した人々をも含む、ミカエル三世の「従者団」のことと考えているが、首肯し難い。ヘタイレイアは九世紀になって新設された近衛兵部隊であって、正式な国家機構の一部である。[39] また前節で検討したような、ミカエル三世の側近集団の人々との間に、全くつながりを持っていない。さらにバシレイオスはすぐにプロトストラトル(皇帝乗馬時の随身)となってヘタイレイアを離れている。[40] その結果バシレイオスとヘタイレイアとの関係が全くなくなってしまったとは考えられないものの、ヘタイレイアをミカエル三世の私的な「従者団」と考えることには無理がある。

ミカエル三世に仕えるようになって以降、バシレイオスはミカエルの信任を得て急速にその地位と影響力を強化していく。八六五年にはパトリキオスの爵位とパラコイモメノスの官位を得、さらに翌八六六年にはバルダスを暗殺して共同皇帝位に就く。

こういったバシレイオスの経歴を考えていく上で注意すべき点がある。それは、彼が行政機構に関係する役職ではなく、皇帝の身辺にいて皇帝の世話をする、家産機構的性格の強い役職を歴任していることである。そして前節で分析したミカエル三世の側近高官集団の人々とは、コンスタンティノス・マニアケスを除くと、バシレイオスとの間の人間関係が全く看取できない。またコンスタンティノス・マニアケスもバシレイオスと同様に、宮廷護衛長官という、家産機構的性格の強い役職に就いていた人物である。こうしたことから、バシレイオスの急速な昇進はミカエル三世との私的な信頼関係が

大きく影響していた可能性が高いものの、Beck が主張しているように「従者団」を利用しての上昇であったとはいえないことがわかる。

次に、Beck がバシレイオスの「従者団」に属していると考えている人々について検討を加えていきたい。Beck によると、彼らはバルダス暗殺、及びミカエル三世暗殺時に実行部隊として投入された。『シュメオン年代記』によると、バルダス暗殺には「彼(バシレイオス)の兄弟のマリアノス、彼の兄弟たちであるシュンバティオスとバルダス、彼の従兄弟であるアシュレオン、さらにペトロス・ブルガロス、ヨハネス・カルドス、そしてコンスタンティノス・トクサラスが加わっていた」。またミカエル三世暗殺には以上の人々の他、ヤコビツェス・ペルセス、エウロギオス・ペルセス、アルタバスドス、グレゴリオス・フィレモノスが参加している。[41] 彼らはバルダス暗殺やミカエル三世暗殺の際にバシレイオスと行動を共にしており、バシレイオスと親しい関係を持った集団を形成していたことは確実である。

彼らは大別して、バシレイオスの一族とそれ以外の人々に大別できる。始めにバシレイオスの一族について検討していく。

バシレイオスの兄弟であるマリアノスは、コンスタンティノス七世の編纂した『儀式について』と、マリアノス宛の総大主教フォティオスの書簡から、ドメスティコス・トーン・スコローン(タグマ〔中央軍〕のスコライ部隊長官)だったことがわかる。[42] そして彼の在職期間については Winkelmann が、八六六年にバルダスが暗殺された直後に任命されたことを明らかにしている。[43] すなわちミカエル三世暗殺時には国家の要職を務めていたことになる。また Winkelmann はマリアノスが、ドメスティコス・トーン・スコローンに就任する以前から何らかの役職に就いていたと指摘している。[44] また彼はバシレイオス一世時代にはマギストロスの高爵位を得ている。[45]

シュンバティオスについても同様に Winkelmann が印章資料などから、ドメスティコス・トーン・エクスクビトーン(タグマのエクスクビトイ部隊長官)に、マリアノスと同時期に就任したことを明らかにしている。[46] シュンバティオスは『儀

式について』によると、皇帝一門として丁重に埋葬されている[47]ので、バシレイオス一世時代にも高い地位を得ていたと推定できる。バルダスについては他に何の資料も残っていないが、彼の子のバシレイオスは後にライクトル（皇帝顧問官）になっており、子孫も一〇世紀に至るまで繁栄している[48]。バシレイオスの従兄弟であるアシュレオンは、『シュメオン年代記』によるとバシレイオス一世時代に罪を得て追放され、その地で奴隷たちによって暗殺されたという。他には何の資料もない。ただしここから少なくともバシレイオス一世時代初期には優遇されていたことは看取できる[49]。

次にバシレイオスの一族以外の人々について検討していく。第一にヨハネス・カルドスは『シュメオン年代記』によると、「カルディアのストラテラテス（ストラテーゴス）になったが、皇帝に対して陰謀を企図したため、ストラテラテスのアンドレアスによってはりつけにされた」[50]。一方、カルディアの中心都市であるトレビゾンドの府主教だったヨハネス・ラザロプロスの『聖エウゲニオスの奇蹟概説』などによると、ヨハネスはパトリキオスの爵位を持ち、シュルメナなる地の修道院の創設者の子で、バシレイオス一世時代にカルディアのドゥクスを務めていたという[51]。こうしたことからヨハネスはカルディア地方で経済的にも政治的にも発言力を持っていた、地方の有力者だったと考えられる。

第二にコンスタンティノス・トクサラスがあげられる。彼は、『シュメオン年代記』によるとテマ・キビュライオタイで不遇の死を遂げている[52]。また一〇世紀までに成立した『コンスタンティノープル史蹟案内』によると、彼はマングラビテス（侍従）だったという[53]。バルダスが暗殺される直前にミカエル三世のテントを訪れたバルダスに正式に応対したのがコンスタンティノスだったこと[54]も、彼がマングラビテスだったことを強く示唆している。

コンスタンティノス・トクサラスが務めていたマングラビテスという役職は、レオン・アルギュロスやニケフォロス・フォーカスなど、後にドメスティコス・トーン・スコローンとなるような、いわゆる小アジア軍事家門の成員が若年時に務めることの多かった役職である。小アジア軍事家門の成員は若年時にコンスタンティノープルへ上って皇帝たちと親密な人間関係を形成して、後の経歴を有利にすることが多かった[55]。コンスタンティノス・トクサラスがキビュライオタイと

いう小アジアのテマで没していることを考えると、トクサラス家もヨハネス・カルドス同様小アジアに根拠をおく有力者の一つだったと考えられる。なお、九一七年にミカエル・トクサラスなる人物がパトリキオスのヨハネス・ロディノスと共にシリアに使者として赴いている。[56] 彼はコンスタンティノス・トクサラスの一族である可能性が高い。

ペトロス・ブルガロスについては何の資料もない。ヤコビツェス・ペルセスについても彼の悲惨な死についての情報しかない。[57] 彼はアペテラスなる後辞を付されることがあるが、アペラテスというのは『儀式について』によると軍事義務を負えなくなったテマの一般兵士が編入された軽装の兵士である。[58] ゆえに彼は社会の下層出身だった可能性がある。

アルタバスドスはその名からアルメニア系である。[59] 彼は『シュメオン年代記』によると、ミカエル三世暗殺時にヘタイレイアルケス(ヘタイレイア長官)だった。[60] また一〇世紀の史料によると、バシレイオス一世時代にマギストロスのアルタバスドスなる人物がいて、彼の妻はヘレナという名だったという。アルタバスドスという名は稀な名だったから、同一人物である可能性は高い。[61]

エウロギオスについては何の資料もない。グレゴリオス・フィレモノスは、バシレイオスが単独皇帝になった直後にパピアス(宮廷の宦官)になっている。[62] 他には情報がない。

以上のようにバシレイオスの「従者団」のメンバーについて検討を加えてきた。そしてそこから、その中でバシレイオス一世時代に高い地位を得ている者とそうでない者との間に、明白な差異があることが看取できる。すなわちバシレイオスの一族か地方の有力者たちが、バシレイオス一世時代に大きな影響力を行使しているのである。それに対してその他の者たちがバシレイオス一世時代に有力者になっていたということは資料からは看取できない。バシレイオスの「従者団」が、バシレイオスとの間に結ばれた私的な人間関係であったことは疑えないが、しかし社会的上昇を獲得するための条件は「従者団」への参加ではなかった。

以上の検討から、次のような点が指摘できる。第一に、バシレイオスの社会的上昇は「従者団」に加盟したために達成

されたものではなかったということである。「従者団」が社会的上昇の手段となってはいなかったことは、バシレイオスの「従者団」の検討からも明らかである。バシレイオスが社会的上昇を達成できた最大の要因は、アルメニア系という点で結びついた社会的結合の存在だった。またバシレイオスの一族が高い地位を享受することができたのは、血縁関係が存在していたからに他ならない。

第二に、中央の有力者と地方の有力者との間の人間関係の存在が指摘できる。七～八世紀においても、地方に富裕な人々が存在していなかったわけではない。しかし聖フィラレトスに代表されるように、政治には興味や関係を抱いていなかった人々が多かったと考えられる。[53] しかしながら九世紀に入ると対外関係の安定や経済発展などに伴なって、小アジア中央部の牧畜地帯を中心として大土地所有者が増加し、富裕化した人々が多数出現するようになってくる。[54] そしてミカエル三世の時代には、先述したダネリス未亡人やヨハネス・カルドスの例からもわかるように、中央の皇帝や有力者との結合を得て、政治に積極的に参画しようと意図するようになっていた。これは九世紀における飛躍的な経済成長や中央集権化に伴なう中央の影響力増大に伴なって、中央との結び付きを持つことが地方の人々にとって魅力的になったからであろう。[55] しかし中央の有力者と何らかの関係を持っていなければ、爵位や官位を獲得することはできなかった。それゆえ爵位や官位、栄誉を得るために、地方の有力者たちは中央の有力者との人的結合を得ようと腐心していたと考えられる。他方中央の人々は、ダネリス未亡人の例からわかるように、経済的援助などを期待していたと考えられる。ここから、中央と何の関係を持たない地方の人々が社会的上昇を得るためには、ある程度の経済力や実力を有していなければならなかったと推測できる。それゆえ Beck の主張するような、きわめて大きな社会的流動性が存在していたとは考えにくい。

(c) バルダスの「従者団」

Beck によると、ミカエル三世の叔父であるバルダスもまた「従者団」を持っていたという。しかしこれまでの検討か

ら、Beck の主張するような社会的結合体として「従者団」が存在していたかはきわめて疑わしい。それゆえ本節では、バルダスの「従者団」とは如何なる存在であったのか検討していく。

Beck によると、バルダスの「従者団」はテオクティストス暗殺の際に暗殺実行部隊として投入されたほか、バルダス暗殺の際にも現われるという。それゆえその両方の事件の際の状況から検討を行うことにする。

テオクティストス暗殺について、詳細な報告を残しているのは『ゲネシオス年代記』と『シュメオン年代記』である。これらによるとテオクティストス暗殺を計画したのはバルダスとミカエル三世である。二人の側には当時パラコイモメノスだった宦官のダミアノス、バルダスの姉妹であるカロマリア、テオクティストスと対立していたプロトスパタリオスのテオファネス・ファルガノス、そしてメリッセノスらの「元ストラテーゴスたち」がついて暗殺を実行した。テオクティストスは最終的にはミカエル三世のヘタイレイアによって殺された。[66]

テオクティストス暗殺に関与した人々を一見すると、彼らが主にテオクティストスと対立していた高位保持者・高官だったことが看取できる。バルダスは先述したようにテオクティストスと当時激しく対立していた。ミカエル三世も当時成人していて政治の実権を握ろうとしていた。テオファネス・ファルガネスもテオクティストスと対立していた。[67] メリッセノスもテオクティストス時代にテマ・アナトリコンのストラテーゴスを解任されたと考えられる。[68] またヘタイレイアも先述したように「従者団」ではない。

次に、バルダスが暗殺される際の状況について検討する。『続テオファネス年代記』によると、バルダスの暗殺者たちはバルダスを暗殺するその時になっても、バルダスの「ヘタイレイア」を恐れていたという。[69] それゆえここではバルダスの「ヘタイレイア」とはバルダスに私的に奉仕する集団=「従者団」であったのか検討していくことにする。

バルダスの「ヘタイレイア」について詳細に言及している史料はない。しかし『シュメオン年代記』が有益な証言を残している。すなわち『シュメオン年代記』によると、

日が昇ってから、(バルダスは) 美しい衣装を身につけて、馬に乗って皇帝のテントへと赴いた。彼を多くの人がとり巻いていて、その中には勇敢なプロトストラトルであるエウスタティオス・アルギュロスもいた。[70]

という。ここで言及されているエウスタティオス・アルギュロスがバルダスの「ヘタイレイア」のメンバーであることは明らかである。アルギュロス家は小アジア軍事家門の一つである。エウスタティオスの父のレオンは八五五年頃に小アジアでトゥルマルケス(テマ次官)を務めていた。[71] エウスタティオスも後にアナトリコンのストラテーゴスなどを歴任する。[72] それゆえエウスタティオスもコンスタンティノス・トクサラスと同様、若年時にコンスタンティノープルへ出て官位を得、バルダスの側で勤務していたと考えられる。

他のメンバーについての情報は残っていないものの、エウスタティオスがプロトストラトルという公的な役職についていること、またバルダスがカイサルの衣装を身に付けて皇帝のテントを訪れるというきわめて公的な状況下にバルダスの身辺警護を担当していることを考えると、バルダスの「ヘタイレイア」がバルダスに私的に奉仕している集団、「統治機構外の統治手段」であるとは考えにくい。むしろカイサルだったバルダスの身辺警護を目的とした、正式な統治機構としてのヘタイレイアの一部だったと考えられる。

それゆえバルダスの身辺には「従者団」というべき集団の存在は、資料からは確認できない。そしてもちろん、バルダスの「従者団」が当時の政治に大きな役割を果たしていたということも全く看取できないのである。

(d) 小　括

本章での検討を簡単に総括しておきたい。

Beck は支配構造や社会構造を説明するにあたり、「従者団」という概念を導入した。「従者団」は先述したように、「統治機構外の統治手段」であり、社会的流動性をもたらす大きな要素であったと Beck は主張した。

しかしながら本章で検討したように、ミカエル三世やバシレイオス、バルダスの周囲に存在した集団が、Beck の言うような「従者団」ではなかったことは明らかである。ミカエルの周囲にいた「従者団」は、実際には中央行政機構の要職を占めていた官僚たちであった。彼らはミカエル三世と親密な関係を保ちつつ政治に携わっており、時にはその任務を越えて皇帝と交わり、また皇帝のために集団として行動をとっていた。要するに彼らはミカエル三世が最も安心して利用できた、皇帝の側近高官集団だった。彼らは確かに官僚としての任務を越えてミカエル三世と親交を重ね、また政治的行動をとってはいる。しかしながら彼らは明らかに中位以上、そして大半は高位の官僚たちであった。ビザンツ帝国の統治機構のまさに中枢にあって、ビザンツ帝国の政治を担っていた人々であった。彼らは官僚制と対立する存在ではなく、官僚制の中枢に位置していたのである。

またバシレイオスはその集団とは重なることのほとんどない、皇帝の家産機構内に位置を占めていた人物だった。バシレイオスの「従者団」は、バシレイオスの一族、地方の有力者たち、そして社会的地位の低い人々からなっている社会的結合である。彼らの中には国家機構内で官位を得ていた者たちもいた。また彼らがバシレイオス一世の単独統治開始後、官僚制を掣肘する存在として機能していたとは考えられない。バルダスの「従者団」も、カイサルであるバルダス警護のための近衛兵部隊と考えるのが適切である。Beck が主張するような意味での「従者団」は存在しなかったのである。Beck が「従者団」と考えた集団は、個々に異なった性格を持った社会的結合であって、それに統一的な定義を与えることは不可能である。

また、バシレイオスが社会的上昇を成功させた大きな要因は、「従者団」ではなかった。それは一つにはアルメニア系であるという点で結びついた社会的結合であり、また地方有力者との親密な関係であった。さらにバシレイオスの「従者団」の成員の中で社会的上昇が可能だったのはバシレイオスの一族か地方の有力者という、バシレイオスと何らかの関係を持っていた人物たちに限られていた。このことはバルダスの「従者団」のメンバーの一人、エウスタティオス・アルギ

ュロスの例からも確認できよう。さらに先述したように「従者団」に確固たる定義づけを行なうことができない以上、「従者団」が社会的流動性に大きく関わっていたと断ずることも不可能である。

確かにミカエル三世の時代には種々の社会的結合が存在していたことが看取できる。それは例えば民族を介したものであったり、血縁関係であったりしていた。そしてそれらはビザンツ社会の流動性と大きく関係したものであった。しかし、Beck の主張するような「従者団」は社会の流動性に大きく影響していたわけではなかったのである。ヤコビツェス・ペルセスやアペラテスのように、バシレイオスに私的に仕えていたと思われる人物もいた。また皇帝であるミカエルの場合にはバシレイオスが所属していた家産機構のメンバーや宦官たちが、皇帝個人に私的に仕えているという色彩の強い役目を果たしていただろう。しかしながらそういったものが社会的上昇に大きな影響を与えたということは看取できない。バシレイオスの例も、後述するようにきわめて例外的なものであり、バシレイオスの例をもってビザンツ帝国の社会で一般的に大規模な社会流動が起きていたと断ずることはできない。

Beck の主張するような、きわめて大きな社会的流動性は看取できない。ミカエル三世の時代、社会的地位の上昇に成功することができたのは、原則として地方の富裕化した有力者か、中央の高官たちの一族だった。

① ミカエル三世は八四〇年一月生まれと推定されている。ミカエル三世の生年については C. Mango, "When was Michael III born?", *DOP 21* (1967), pp. 253-258.

② Ioseph Genesios, *Regum Libri Quattuor*, ed. A. Lesmueller-Werner & I. Thurn, Berlin, 1978.（以下、Gen. と略）

③ R. J. H. Jenkins, "Constantine' VII's Portrait of Michael III", *Bulletin de la Classe des Lettres et des Sciences morales et Politiques Academie Royale de Belgique 5e série XXXXIV*, 1948, pp. 71-77.

④ 『シュメオン年代記』の名で伝わっている完本は現存せず、『テオドシオス・メリテノス年代記』Theodosios Melitenos, *Chronographia*, München, 1859.（以下、ThM と略）、『レオン・グラマティコス年代記』Leon Grammatikos, *Chronographia*, Bonn, 1842.（以下、LG と略）、『続ゲオルギオス年代記A』Georgios Continuatus, *Chronographia*, Bonn, 1838.（以下、GCA と略）などの名称で写本が現存している。本稿ではオリジナルに最も近いと推定される『テオドシオス・メリテノス年代記』を利用し、他年代記についても対応頁を示す。なお『シュメオン年代記』の写本については、A. Sotiroudis, *Die Handschriftliche Überlieferung des《Georgius Continuatus》*(Re-

daktion A)., Thessaloniki, 1989.

⑮ (Pseudo-) Symeon Magistros, *Chronographia*, Bonn, 1838. (以下、Ps. Sym. と略)

⑯ G. Zacos & A. Veglery, *Byzantine Lead Seals*, 3 vols, Basel, (以下、ZV と略)

⑰ ThC 172.

⑱ ThC 172.

⑲ J. D. Mansi (ed.), *Sacrum Concilionum nova et Amplissima Collectio 16*, Raris, 1902. (以下、Mansi と略) c. 19, 27, 81, 96, 134, 143, 158.

⑳ Winkelmann, S. 83.

㉑ ThC 198–199.

㉒ J. B. Bury, *A. History of the Eastern Roman Empire*, London, 1912, p. 162, n. 2.

㉓ ThM 174, LG 249, GCA 835.

㉔ P. Karlin-Hayter, "Michael III and Money", *BS* 50 (1989), pp. 1–8, pp. 4–5.

㉕ ThC 200–202.

㉖ Ps. Sym. 662–664; Nicetas David Paphragonos, *Vita Ignatii*, PG 105, c. 528 A-C.; Mansi, c. 154, 169.

㉗ Mansi, c. 153–154.

㉘ ThC 250.

㉙ ThC 208, 250.

㉚ ThM 174, LG 249–250, GCA 835–836.

㉛ R, Guilland, "Patrices des règnes de Théophile et de Michel III", *Revue des Etudes Sud-Est Europeénnes 8* (1970), pp. 593–610, pp. 602–603.

㉜ Gen. 58, ThM 174, LG 249, GCA 835. cf. Ps. Sym. 681.

㉝ Gen. 57–58, 63–64.

㉞ コンスタンティノス・マニアケスの子のトマスはロゴテテース・トゥー・ドゥロミーとなっている。もう一人の子のゲネシオスは九世紀末にマギストロスになっている。歴史家ゲネシオスはトマスの子で、コンスタンティノス七世時代にエピ・トゥー・カニクレイウー(皇帝のインク管理長官)を務めている。Bury, *op. cit.*, pp. 460–461.

㉟ 当時総大主教であったイグナティオスは、イコノクラスムたちの対応などをめぐってミカエル三世と対立していた。グリゴロスの行なっていた典礼のパロディーなどの行動はイグナティオスを誹謗すべく行なわれた。

㊱ Karlin-Hayter は、ミカエルの「従者団」のメンバーがあた名で伝えられていたり、官位や階位が記述されていないことについて、ミカエル三世やその側近たちを誹謗するために『続テオファネス年代記』編集者が故意に記述しなかったと推測している。Karlin-Hayter, op. cit., pp. 4–5.

㊲ Beck, Gefolgschaftswesen, S. 4–18.

㊳ バシレイオスの経歴については ThC 211–255, ThM 161–164, LG 231–235, GCA 817–821.

㊴ ThC 218.

㊵ ThM 163, LG 232, GCA 819. ThC は実家から直接コンスタンティノープルへ出たとしている。

㊶ ThM 163, LG 232, GCA 818.

㊷ この一族の名字の表記は資料によって異なり、ツトンツミス、ザクーツミスの他にも、ツトウツミス、タツトテスなどと表記されている。これはアルメニア語をギリシア語表記する際に起きた混乱であろう。cf. M. W. Herlong, *Kinship and Social Mobility in Byzan-*

tium 717–959, Ph. D. of Catholic University in America, Washington D. C., pp. 143–144.

㉝ ThC 223–224, Gen. 76–77, ThM 163, LG 234, GCA 819.

㉞ ThC 230, Gen 78. 『ヨハネス年代記』は、ベンヤミンが「近縁関係 ἀγχιστεία」にあったとしている。

㉟ Thc 226–228.

㊱ ベンヤミンがコンスタンティノープルにやって来たのは八五六年の春頃。N. Adontz, "L'age et l'origin de l'empereur Basile I (867–886)", *Byzantion 8* (1933), pp. 475–500, p. 489. ベトラスに赴いたのは八五六年の晩春から初夏にかけての頃。N. Tobias, *Basil I (867–886), The founder of the Macedonian Dynasty: A study of political and military history of the Byzantine Empire in ninth century.*, Ph. D. of Rutgers University, 1969, pp. 109–110.

㊲ R. J. H. Jenkins, "The Classical Background of the Scriprores Post Theophanem", *DOP 8* (1954), pp. 13–30, p. 27.

㊳ ThM 160–161, LG 230, GCA 816–817.

㊴ クタヤシイトについてはさしあたって H. Ahrweiler, "Recherches sur l'administration de l'empire byzantin aux IX–XIe siècles", *Bulletine de Correspondance Héllenique 84* (1960), pp. 1–111, p. 27.; cf. Beck, Gefolgschftswesen, S. 14. n. 4.

㊵ ThM 166, LG 237, GCA 823–824.

㊶ ThM 170–171, 175–176, LG 244, 251–252, GCA 829–830, 837–838.

㊷ Constantinos VII, *De Cerimoniis*, Bonn, 1829. (以下 De Cer. と略) 648; Photios, *Epistorae*, Leipzig, 1983–1985, 189, 190.

㊸ Winkelmann, S. 89–91.

㊹ *ibid*, S. 91.

㊺ *ibid*, S. 89–90.

㊻ *ibid*, S. 92–94; ZV 2403.

㊼ De Cer. 648.

㊽ ThM 175, GCA 837; Herlong, *op. cit.*, p. 77.

㊾ ThM 177, LG 253, GCA 839–840.

㊿ ThM 177, LG 253, GCA 839.

(51) N. E. Bees, "Sur quelques évêchés suffragants de la Métropole de Trébizonde", *Byzantion 1* (1924), pp. 117–137, pp. 126–127.

(52) ThM 177, LG 254, GCA 840.

(53) Th. Preger (ed.), *Scriptores Originum Constantinopolitanarum*, Leipzig, 1901–1907, p. 250.

(54) ThM 177, LG 254, GCA 840.

(55) cf. 根津由喜夫「十世紀ビザンン帝国の権力構造—人的結合の視角から—」『富山大学人文学部紀要』第一七号、一九九一年、七〇頁。

(56) ThC 388, ThM 207, LG 294, GCA 880–881.

(57) ThM 176–177, LG 253–254, GCA 839.

(58) De Cer. 695–696.

(59) アルタゾスドスはアルメニア語の Artawazd のギリシア語形。

(60) ThM 176–177, LG 252, GCA 838.

(61) *De Sacris aedibus deque Miraculis Deiparae ad Fontem* ,AASS Nov. III, 882 D. Jenkins はこのくだりをベンヤミン一世の娘としている。Jenkins, op. cit., p. 28.

(62) ThM 176, LG 252, GCA 838.

(63) cf. Winkelmann, S. 29–32. 聖トマラコトスについては M. H. Fourny & M. Leroy, "La vie de S. Philarète", *Byzantion 9* (1934), pp. 85–170.

(64) M. F. Hendy, *Studies in the Byzantine Monetary Economy. c. 300–1450*, Cambridge, 1985, pp. 100–104.

(65) 経済成長や中央集権化によって中央政府の経済的実力が飛躍的に強大化し、中央からの富や権力の再分配の持つ意味も高まったと考えられる。cf. W. T. Treadgold, *The Byzantine State finances in the eighth and ninth Centuries*, New York, 1982.

(66) Gen. 61–64, ThM 164–165, LG 235–236, GCA 821–822.

(67) ThM 160, GCA 815.

(68) cf. ThC 165–166.

(69) ThC 205–206, 237–238.

(70) ThM 171, GCA 830; cf. Winkelmann, S. 169.

(71) ThC 165, 374.; cf. Winkelmann, S. 169.

(72) ThC 369–374.

三　ミカエル三世と政治

本章では始めに、前章での分析の結果をも踏まえつつ、第二の課題、すなわちミカエル三世は実際に政務を行なうにあたって、どのような勢力とどのような関係を構築していたのか、について検討を加えていく。そしてその上で、ミカエル三世時代の支配構造について考察していく。

(a)　ミカエル三世時代の支配構造

ミカエル三世が親政を行なっていた時代は、テオクティストスが暗殺されて皇太后のテオドラが引退に追い込まれた八五六年から、暗殺される八六七年までであるが、この時期はさらに、バルダスが大きな影響力を持っていた八六六年まで、バシレイオスが共同皇帝位にあった八六六～八六七年の二つの時期に分けられる。本節では第一の時期に中央行政機構の要職についていた人々について検討する。

この時期に中央行政機構の要職にあった人々の顔ぶれから、二つの点が指摘できる。第一に、バルダスの一族や側近が多いことである。例えばロゴテテース・トゥー・ドゥロムーにはバルダスの婿のシュンバティオスが就任している。[①] プロトアセクレティスはバルダスと血縁関係のあったフォティオス(八五八年に総大主教に就任)[②]が占めている。またロゴテテース・トゥー・ゲニクー(税務長官)にはバルダスの親友で側近のフィロテオスが就任している。[③] コンスタンティノープルの

軍事力を握っているドメスティコス・トーン・スコローンにも、バルダス自身、ついでバルダスの兄弟のペトロナスや次子のアンティゴノスが相次いで就任している。[4] 要するにバルダスはコンスタンティノープルの行政機構・軍事機構の双方に大きな影響力を行使できる体制を築いていたということになる。

第二に指摘できる点として、バルダスが自己を中心とする広範な親族関係のネットワークの中心に位置していたことがあげられる。バルダスは婚姻関係を通じてバブーツィコス家[5]やグベリオス家[6]、コントミュテス家[7]など、当時高い爵位を持っていた家門との親族関係を形成していた。このネットワークはバルダスの姉妹のテオドラがテオフィロスの皇后となって以降、テオフィロス～テオドラ時代に形成されていったものと考えられる。要するにミカエル三世とバルダスを中心にして、広範な親族ネットワークがこの時期に形成されていたと言っても過言ではない。

こうしたネットワーク内にいた人々は、ミカエル三世やバルダスの政権獲得に伴なって高い爵位や官位を得たわけではない。彼らの大半は、既にテオフィロス、その父のミカエル二世（在位八二〇～八二九年）、あるいはそれ以前から国家機構内で重要な地位を占めていた一門の一族である。バルダスやミカエル三世との親族関係が確認できない人々も、その多くは八世紀末から九世紀前半以降何代かにわたって政府内で枢要な地位を占めていた一門出身である。前章で言及したメリッセノスもその一人である。[8]

こうしたことに関連して注目すべきものに名字がある。七～八世紀にはほとんど見られなかった名字は、八世紀末以降出現するようになり、ミカエル三世の時代には名字を持った家門が多数にのぼるようになる。そして Winkelmann によると、それらの多くは一〇世紀や一一世紀にも現われるものである。[9]

こうした事実から、ミカエル三世の時代の中央行政機構の要職就任者たちの間では、家門意識がかなり強いものとなっていたことが看取できる。そして彼らはバルダスやミカエル三世を中心とする広範な親族ネットワークを形成していたのである。

また、こういった親族ネートワークに直接つながりのなかった人々も、バルダスやミカエル三世と対立していたわけではなかった。『続テオファネス年代記』によると、「全てのアルコンやストラテーゴスたち」がバルダスに忠実であったという。[10] このことは、当時の高官たちがバルダスやミカエル三世たちと一体になって広範な社会的結合を形成していたことを示していると言えよう。

そして彼らは、ミカエル三世時代の政治にきわめて大きな影響を与えていた。前章で検討したテオクティストス暗殺において、暗殺参加者の大半が中央行政機構の要職にあった者たちや高位保持者であったことは象徴的な事例である。また後で詳しく検討するように、彼らはバルダスの暗殺やミカエル三世の暗殺などの政変が起きても、その地位を失うことがなく、バシレイオス一世の政治遂行の対抗勢力としても作用していたのである。

以上から我々は以下のような結論をくだすことができよう。すなわち、ミカエル三世の時代には中央行政機構の要職の多くは、八世紀末〜九世紀前半以来要職を歴任し、高位を得てきた一族によって占められるようになっていた。彼らは家系的連続性を持ちつつあり、一つの社会集団としての形を取っていた。そして政治の変動にも影響されることが少なく、時には政治の動向を左右する実力を持った存在となっていた。それゆえ我々は、ミカエル三世の時代には政治的に安定し、強力な発言力や政治的実力を持った高官層が存在していたと考えることができる。

コンスタンティーノープルの高官層がこのような実力を持つようになった背景には、九世紀に急速に進展した中央集権化と、それに伴なう官僚制度の整備が大きな影響を及ぼしている。四世紀以来存続していた後期ローマ帝国の行政機構は、七世紀以降の急速な状況変化や、テマの出現などによって大きな変貌を迫られることになった。新しい行政機構は、その骨格は既に七世紀後半までにその姿を現わしていたものの、一気に整備が進んだわけではなく、行政機構の整備が一応の完成を見たのは九世紀前半のことである。[11] そして行政機構の整備に伴ない、爵位制度の整備も進んだ。[12] また、九世紀前半には、地方行政制度にも手が加えられた。[13] 八世紀に繰り返して反乱を起こし、皇帝やコンスタンティーノープルの中央行政

機構にとっての脅威にもなっていたテマは、八世紀末以降のテマの分割などの改革の結果、九世紀前半までには以前維持していた自立性を失い、地方行政機構として中央行政機構の強い影響下に置かれることになり、強力な中央集権化が進んだのである。[14]

以上要するに、九世紀前半までにビザンツ帝国においては国家行政機構の整備が進み、皇帝を頂点とする整備された中央行政制度と、官位にほぼ対応し、行政制度と密接な関連を持っていた爵位制度を中核とした官僚制度が成立していた。そして時を同じくして進展していた中央集権化によって、きわめて大きな政治的影響力をビザンツ帝国の政治や社会全体に及ぼすことが可能になっていた。高官たちが官僚制度の整備や中央集権化の進展とともに、その頂点に位置する集団として、きわめて大きな実力を行使するようになったのは、当然のことであった。

高官層の影響力の強さを示す例として、テオフィロス・リュディアテスの例があげられよう。彼はメリッセノス家の女性との結婚の結果、プロトスパタリオスの爵位を得ている。[15] ここから、高官層と関わりを持ち、そのネットワークに加入するということが社会的上昇のための有効な手段となっていたことが理解できる。前節で紹介したエウスタティオス・アルギュロスもその一例にいれることができよう。そしてそのことは同時に、高官層と関係を持っていない人々の社会的上昇の可能性を著しく減らすことにもなる。前章で検討したように、「従者団」は社会的上昇の手段としては有効に機能していなかったが、それは高官層が確固たる社会的結合として存在していたことも大きく影響しているだろう。

しかしこのように高官層の人々によって中央行政機構の要職が占められると、皇帝の政治における裁量権が彼ら高官層によって阻害される可能性は高まる。事実先に引用した『続テオファネス年代記』からの記述（六三頁）からも、高官の多くがミカエルではなくバルダスに忠実だったことが看取でき、ミカエルが自らの意志を政治に反映させることが困難になる場合も予想できる。このような事態にあって、ミカエルは自己の発言力をいかにして確保していたのであろうか。節を改めてこの点について検討することにしたい。

(b) ミカエル三世と高官層

本節ではミカエル三世とバシレイオス一世の高官層との関係、および裁量権確保のための方策について検討を加えていく。

はじめに述べたように、Beck は「従者団」という存在の想定によって説明を行なった。しかし前章で分析したように、Beck の主張するような「従者団」が、ミカエル三世の時代に存在していたことは看取できない。そして Beck は安定した支配層が存在していなかったとしているが、これも前節での検討によって、ミカエル三世時代には中央行政機構の頂点にある高官たちが政治的影響力の強い社会的結合を形成していたことも明らかになった。それゆえ我々は、安定した高官層が成立していたことを踏まえつつ、皇帝と高官層との関係、そして皇帝の政治遂行のための方策について、再検討を加える必要がある。そのために我々はこれまでの考察結果を再検討しつつ、ミカエル三世が政治の遂行にあたってどのような行動を取り、どのような位置を占めていたかを捉え直すことが必要である。

そのような観点から注目すべき点として、中央行政機構内に前章で検討したミカエル三世の「従者団」の人々を始めとして、ミカエル三世の側近と考えられる人々が多いことが指摘できる。例えば先述したグリュロスは、サケラリオス（財務長官）職にあった可能性が高い。[15] 八五八年にフォティオスが総大主教に就任した後、プロトアセクレティスにはケイラス（アガリアノス）が就任している。またこの時期のヒュパルコスにはニケタス・オオリュファス[17]とコンスタンティノス・ミュイアレス[18]が就任しているが、このうちニケタス・オオリュファスは『偽シュメオン年代記』や、一〇世紀に成立した『続ゲオルギオス年代記B』によると、ミカエル三世に「忠実な人間」で、ミカエル三世が暗殺されたことを聞くや、彼はバシレイオス一世に対して復讐を企てようとしたという。[19] ここからも彼がミカエル三世にきわめて忠実な存在だったことがわかる。なお彼はミカエルによってドゥルンガリオス・トゥー・プロイムー（首都艦隊長官）にも任命されている。[20] ミュイアレス家は、後述する八八六年のバシレイオス一世に対する陰謀にも参加している。こうしたことからミカエルやバ

ルダスの支持者だったと考えられる。またこの両家ともミカエル三世時代以前から中央行政機構で要職を占めていた一門である。[21]

さらにドゥロモスのプロトノタリオスのような中堅の役職にもクラサスが就任している。前章で紹介したように、ミカエルの「従者団」の中にはスパタリオスやスパタロカンディダトスのような中位の爵位を持った人々も存在していたことを考えると、他にも中堅官僚のなかにミカエル三世の側近がいたことは確実であろう。

こうしたことから、ミカエル三世は自己の側近を中央行政機構の要職につけることによって、行政機構内における自己の立場の足掛かりとしていたことがわかる。これまでの分析から、ミカエル三世の「従者団」は中央行政機構内に形成されていたミカエルの側近集団だったことがわかる。そして『続テオファネス年代記』が伝える「従者団」とミカエルの行動も、ミカエルと彼ら側近官僚集団との親密な関係を示すものである。

ミカエルは彼らに対して気前よく贈与を行なっている。[22] 贈与が側近官僚集団との親密さを形成する手段だったことは明らかである。またミカエルは彼らの子息たちに対して頻繁に洗礼の代父を務めている。[23] R. Macrides が指摘しているように、洗礼の代父となることを通じて形成された擬制的親族関係は、時として血縁や婚姻による本来の親族関係よりも強力な人間関係を形成することがあった。また従来からの友好関係の強化にも資した。[24] それゆえミカエルは、側近の高官たちとの関係を強化するために、贈与や洗礼を通じて強力な社会的結合を形成しようとしたと考えられる。

要するにミカエル三世は、Beck が主張するように統治機構の外部に自らの党派を形成するのではなく、統治機構内に党派づくりの努力を行ない、それに成功していた。競馬や贈与、洗礼の代父となることはそのための方策だった。サケラリオスやプロトアセクレティスといった要職に自らの側近を送り込むことができたのは、その成果だったのである。

一方バルダスとも良好な関係を維持している。前節で分析したように、バルダスとミカエルは高官層内に広範に形成された親族ネットワークの中心に位置していた。ゆえに、そもそもこの二人の利害は多くの点で一致しており、対立点は少

なかったと考えられる。事実ミカエルはバルダスを相当信頼していた。『シュメオン年代記』によると、バシレイオスはバルダスを失脚させようとしてミカエルに讒言を行なったが、ミカエルは全く取りあわなかったという。[26] このエピソードからもバルダスに対するミカエルの信頼のほどがうかがえる。無論ミカエルはバルダスに対しても、自らの「従者団」に対して行なったような方策を怠っていたわけではなかった。短期間にカイサルにまで昇格させたことや、彼の子の結婚を仲介したりしているのは、バルダスとの関係強化の努力と理解できる。[27]

以上要するに、ミカエル三世は政治を行なうにあたって、高官層内に自らに忠実な人間集団を形成して、自らの発言権の強化の努力を行なっていた。また同時に高官層の頂点にいるバルダスに対しても親密な関係を構築・強化して、高官層全体に皇帝の影響力が及ぶよう意図していた。ミカエル三世はきわめて巧みな高官層対策を行ない、安定した統治を行なっていたのである。

ミカエル三世の高官層との関係・対策の巧みさはバシレイオス一世の高官層との関係と比較すると一層明白である。それゆえ最後に、バシレイオス一世と高官層の関係についても簡単に検討していきたい。

バルダスが暗殺された直後にバシレイオスは共同皇帝に就任する。しかしこの時期、中央行政機構の要職の就任者には、大きな変化は見られない。軍事面ではバシレイオスの兄弟のマリアノスとシュンバティオスがそれぞれドメスティコス・トーン・スコローンとドメスティコス・トーン・エクスクビトーンに就任しており、バシレイオスの影響力の増大が看取できる。しかしそれに対して行政機構においてはバルダスの死後バシレイオスに反乱を起こしたシュンバティオス(バルダスの甥)が務めていたロゴテテース・トゥー・ドゥロムー以外には変化はない。[28] しかもその後任はバルダスと血縁関係のあるグベルだった。[29] またこの時期の政策はバルダス時代と変わらぬ方針で実行されており、政策に大きな変化が見られるのはミカエル三世の暗殺後である。[30] 要するにこの時期、バシレイオスが中央行政機構内で大きく影響力を拡大したということはなく、以前として高官層の影響力が大きかったことが看取できる。

その理由は本稿での分析の結果の再検討から理解できる。バシレイオスは従来いわれていたような貧農の出身ではなく、高官層の人々とも関係がないわけではなかった。だが彼自身が高官層に属していたわけではなかった。また彼が務めていた役職も、中央行政機構ではなく、皇帝の家産機構の役職だった。要するに彼は高官層とは関係の少ない、高官層に属さない人物だったのである。そのためバシレイオスは高官層の大半の人々からは、高官層に属さぬ人物として意識され、バシレイオスが共同皇帝に就任するに及んで反感に変わったと考えられる。例えば『シュメオン年代記』によると、バルダスの死後反乱を起こしたシュンバティオス（バルダスの甥）は、「ミカエルのみを称賛し、バシレイオスを忌み嫌っていた」という。[30] また H. Grégoire によると、共同皇帝就任後のバシレイオスは官僚や軍隊に人気がなかった。[31] バシレイオスは明らかに孤立していた。ミカエルとバシレイオスが次第に対立していくのも、バシレイオスと高官層の対立が大きな理由の一つになっていた可能性が高い。バシレイオスがミカエルを暗殺したのも、自己の保身のため機先を制したためだったとも考えられる。

単独皇帝となって以降も、バシレイオス一世と高官層との関係は微妙なものたり続けた。バシレイオス一世はミカエル三世の側近を形成していたグリュロスやヒメリオスの更迭を行なったりしてはいない。またその後も高官層に対しては思い切った処断を行なってはいない。そのことを如実に示すのがヨハネス・ネアトコメテスに対する処罰である。ヨハネスは高官層に属し、バシレイオスによるバルダス暗殺計画を未然にバルダスに通報した人物である。バシレイオスはしかし彼を、バルダス暗殺から何年も経ってから別の罪で処罰した。しかもその処罰もきわめて軽いものだった。[32] ここから、バシレイオス一世が強大な高官層に対して高度に慎重な対応を取り続けていたことがわかる。

また、ミカエル三世の親政期には起きなかった、高官層による陰謀が多発していることから、バシレイオス一世と高官層との関係がバシレイオスの治世末期まで劇的には改善されなかったことが看取できる。例えば、先述したように既に即位直後に、ニケタス・オオリュファスがバシレイオス一世に対して反抗している。また八七七年にはクルクアス家のメン

バーによる陰謀が発覚している。[33] そしてバシレイオス一世の最晩年の八八六年には、高官層による極めて大規模な陰謀が発覚する。『シュメオン年代記』によると、この陰謀には「ヘタイレイアルケスのミカエル、カトゥダレス、ミュクサレス、バブーツィコス」など、合計六六人の「元老院議員や高官たち」が参加していた。[34] ミュクサレス(ミュイアレス)家やバブーツィコス家など、ミカエル三世時代にミカエル三世と親密な関係を結んでいた家門が加わっていること、六六人というきわめて多くの高官たちが参加していることは注目に値する。この陰謀はミカエル三世と高官層の関係の良さと、バシレイオス一世と高官層との関係の緊張を象徴していると言っても過言ではない。

バシレイオス一世は晩年、後継者のレオンと激しく対立する。レオンの側にはミカエル三世の従兄弟であるステファノス・カロマリアスや、先述したグベルなど、高官層の多くが味方していた。Winkelmann が述べているように、バシレイオス一世時代になってもミカエル三世やバルダスの支持者の勢力はかなり大きかったのである。[35] またレオンが実はミカエル三世の子である可能性があることも、高官層の態度に影響を与えたかもしれない。[36]

八八六年の陰謀が収拾された直後、バシレイオス一世は急死する。[37] 後を継いだレオン六世(在位八八六〜九一二年)が始めに行なったことは、ミカエル三世の亡骸をコンスタンティノープル近郊のクリュソポリスから、歴代皇帝が葬られているコンスタンティノープルの聖使徒教会へ改葬することだった。その際、多数の元老院議員がクリュソポリスまで赴いたという。[38]

① ThM 169, LG 242, GCA 828, ThC 205.
② ThM 168, LG 240, GCA 826.
③ ThM 171, LG 244, GCA 830.
④ ThM 166, LG 237-238, GCA 823-824, ThC 179-180.
⑤ バルダスの姉妹のソフィアがコンスタンティノス・バブーツィコスと結婚している。ThC 175.
⑥ バルダスの妻のテオドシアはグベリオス家の出身。*Vita Irenes*, AASS Jul.IV, 604D, Winkelmann, S. 168-169, 189.
⑦ バルダスの甥のバルダスがコンスタンティノス・コントミュテスの娘と結婚し、コントミュテス姓を名乗っている。ThC 175.
⑧ メリッセノス家については Winkelmann, S. 152-153, 182-183.
⑨ Winkelmann, S. 207-211.

⑩ ThC 236 ; cf. ThC 205.

⑪ J. F. Haldon, *Byzantium in the seventh century : the Transformation of a Culture*, Cambridge, 1990. (以下、Haldon (1990) と略) pp. 173-207.

⑫ 爵位制度の展開については F. Winkelmann, *Byzantinischen Rang-und Ämterstruktur im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1985.

⑬ Haldon (1990), pp. 194-207.

⑭ テマの反乱や分割については、中谷功治「テマ反乱とビザンツ帝国―『テマ＝システム』の展開―」『西洋史学』一四四号、一九八七年、三二―四〇頁、同「テマの発展―平制から見たビザンティオン帝国―」『古代文化』四一号、一九八九年、八―三二頁。

⑮ *Vita Nicholai Studitis*, PG 105, c. 916D.

⑯ Photios, *Epistorae*, 193.

⑰ ThM 168, LG 240, GCA 826.

⑱ ThM 173, LG 248, GCA 834.

⑲ Georgios Continuatus, *Chronika Georgija Amartola*, Petrograd, 1922. (以下、GCB, と略) 17, Ps. Sym. 687.

⑳ GCB 17, Ps. Sym. 687.

㉑ オネリニフス家の初出は〝カエル二世時代〟ThC 81, Gen. 35, Ps. Sym. 623-624. 〝ヨイアンネス家の初出はテオフィロス時代〟*Scriptores Originum Constantinopolitanarum*, p. 224.

㉒ ThC 172.

㉓ ThC 172.

㉔ R. Macrides, "The Byzantine Godfather", *Byzantine and Modern Greek Studies 11*(1987), pp. 139-162.

㉕ ThM 169, GCA 828, GCB 11.

㉖ ThM 166, LG 238, GCA 824. この時、ルダスの子と結婚したのは、〝カエル三世の愛人や後にレオン一世の皇后となったエウドキア・インゲリナである可能性が高い。

㉗ ThM 173, LG 247-248, GCA 833-834, ThC 240-241.

㉘ ThM 173, LG 247, GCA 833.

㉙ この時期最大の問題であったローマとの関係は、ルダス没後も〝カエル三世によって強硬路線が維持され、〝カエル三世の暗殺直後からレオン一世によって和解交渉が再開された。Dvornik, *op. cit.*, pp. 91-158.

㉚ ThM 173, LG 247, GCA 833.

㉛ H. Grégoire, "The Amorians and Macedonians 842-1025", *The Cambridge Medieval History IV-I*, pp. 105-192, p. 115.

㉜ ThM 178-179, LG 256, GCA 839.

㉝ ThC 277.

㉞ ThM 181-182, LG 261, GCA 847-848. cf. GCB 24.

㉟ Winkelmann, S. 72-75.

㊱ 八六六年に生まれたレオン六世の母親のエウドキア・インゲリナは〝カエル三世の愛人で、『シメオン年代記』はレオンを〝カエルの子としている。cf. E. Kislinger, „Eudokia Ingerina, Basileios I, und Michael III", *JÖB 33* (1983), S. 119-136.

㊲ ThM 183, LG 262, GCA 848.

㊳ ThM 183, LG 262-263, GCA 848-849.

四　おわりに

ミカエル三世やバシレイオス一世が生きた九世紀中～後半は、ビザンツ社会の転換期とも言える時代であった。八世紀から九世紀前半にかけてビザンツ社会を大きく揺り動かしたイコノクラスム（聖像画破壊運動）は、ミカエル三世の治世初年、八四三年に収拾されている。また海上からのエジプト攻撃や小アジアでのメリテネの大守に対する勝利、ブルガリアの改宗、さらにバシレイオス一世時代の南イタリア・ダルマティアに対する支配権の再確立など、対外的にも急速に攻勢に転じていく。文化的にも初めに述べた「マケドニア・ルネサンス」が始まっていく。①

このような、急速な政治的・文化的変革を主導していたのは、皇帝を頂点とした支配機構に位置していた人々であった。それゆえ九世紀中～後半のビザンツ帝国の社会や政治構造の解明のためには、皇帝や高官たちの行動や、政治遂行の方法などについて検討を加えることが必要であり、本稿での愚考がその解明の一助になれば幸いに思う。

本章では初めに本稿での考察によって得られた結論について、再度簡潔にまとめを行なっていきたい。

ミカエル三世・バシレイオス一世の時代のビザンツ帝国には、種々の社会的結合が存在していたことが看取できる。それらは例えば血縁関係を持った親族集団であったり、洗礼などを通した擬制的親族関係であることもあった。また民族的なつながりからのまとまりや地縁的なまとまりもあったと考えられる。しかしながら、Beck が主張するような、「従者団」のような社会的結合が存在していたとは考えにくい。確かに有力者の周囲に、私的に奉仕する集団が存在した可能性は否定できない。しかしながらその集団が社会的上昇に大きく影響していたという可能性は看取できない。また「統治機構外の統治手段」となっていたということも考えられない。

ミカエル三世の時代、ビザンツ帝国の支配構造・社会構造に大きな影響を与えていたのはコンスタンティノープルの高官たちであった。ミカエル三世の時代にはコンスタンティノープルの中央行政機構の頂点に位置していた高官層が大きな

実力を有していた。彼らは九世紀前半までに整備が進んでいた官僚機構と、それと密接に関係を持った爵位制度からなる行政制度を実力の基盤として、政治の遂行にあたってきわめて大きな発言力を有していた。そして既に家門としての連続性をある程度持ち始めており、また相互に親族関係のネットワークを張りめぐらした、巨大な社会的結合と化していたのである。

彼らはミカエル三世時代の支配構造のみならず、社会構造にも大きな影響を及ぼしていた。なぜなら彼らが大きな実力を持って支配構造の上層部を独占していたため、高官への地位の上昇の可能性は限定されたものとなっていたからである。社会的上昇の可能性があるのは、一般的には高官たちと血縁など、何らかの関係を持った者か、この時期増加しつつあったと考えられる、経済的に富裕化していた地方の有力者に限られていたと言ってよい。そして高官層の人々は、自分達とは異質な者が高官層内へ入ろうとするのに対して、一致して排除しようと試みた。そのことはバシレイオス一世の例からも明らかである。

このことは同時に、皇帝の政治参加、そして政策遂行にあたって、時として皇帝の意志と衝突し、その意図と対立することをも予想させる。要するに高官たちがその政治的実力ゆえに皇帝の裁量権を脅かす恐れが出てくるということである。それに対して皇帝は自らの裁量権の確保のため、種々の方策を行なっている。それはミカエル三世の場合にきわめて成功した形態で見いだせる。

すなわち、ミカエル三世は高官たちや中央行政機構の中堅官僚たちの内部に、自らに忠実な側近官僚集団を形成することによって発言力を確保したのである。その際ミカエルが利用したのは、贈与や擬制的親族関係の確保、私的な信頼関係の形成などだった。そしてそれは、Beck が主張するように官僚制に組み込まれていない「統治機構外」にではなく、統治機構の内部、高官層の内部に自らの側近集団を形成したと理解できる。そして彼らはミカエル三世に忠実に、時には本来の任務を越えた政治的行動も行なっている。ミカエル三世の行動は当時の支配構造を良く理解した、合理的なものだっ

たと評価できる。

ミカエル三世の行動は、治世末期に至るまで高官層との関係が微妙なものたり続けたバシレイオス一世とは対照的である。バシレイオス一世はミカエル三世とは違って、クーデターによって政権を獲得した皇帝である。そして自らも皇帝の家産機構を基盤として勢力を蓄えてきた人物で、ミカエル三世時代に大きな勢力を持っていた高官たちとは深い関係を持っていたわけではなかった。そのためバシレイオス一世は一族や宦官、地方の有力者たちを重用して政治を行なう一方で、従来からの高官たちに対しては慎重に良好な関係を形成しようと務めていた。しかし、にもかかわらず、バシレイオスは高官たちの反抗を完全に押さえることはできなかった。

最後に、本稿でのミカエル三世時代の支配構造・社会構造に関する理解を一般化させて、九世紀のビザンツ帝国の支配構造・社会構造に関する見通しを述べておきたい。

これまで述べてきたように、ミカエル三世の時代には、高官層が一つの社会的結合として成立しており、きわめて大きな影響力を行使するようになってきている。しかしながらそういった構造が既に以前から成立していたわけではない。J. F. Haldon が論証しているように、七世紀には古い元老院貴族層が分解して、皇帝の裁量権がきわめて高い支配構造が現出していたと考えられるからである。[2] それゆえ七世紀に見られる社会構造からミカエル三世の時代の社会構造・支配構造への転換がいつ、いかにして起きたかが問題となる。

こうした変化は八世紀末から九世紀前半にかけて起きたと筆者は考えている。この時期には先述したメリッセノス家などの家門が出現していく時期であり、また中央行政制度の整備が急速に進む時期でもある。またビザンツ帝国の経済状況の好転に伴なってコンスタンティノープルの持つ意味も七〜八世紀に比べて大きくなりつつあった。そうした要因から、首都に中央行政機構を拠点とした高官層が次第に発展していた。そして皇帝の裁量権を脅かすまでに成長したのがミカエル三世・バシレイオス一世の時代と考えられる。

一方九世紀末のレオン六世時代以降、皇帝は政治の実務に次第に関与しなくなっていく。またこの時代には、小アジアの有力者たちがテマのストラテーゴス職などを基盤として、軍事面できわめて大きな勢力を有するようになり③、それに伴なって皇帝の親征も行なわれなくなっていく④。そしてコンスタンティノス七世の時代には、首都の行政機構を支配した高官たちと、盛んな軍事行動を背景として、大きな軍事的実力を有していた小アジアの軍事家門とがそれぞれ内政と軍事を主導する政治体制へと発展したと考えられる。こうした見通しの下、ミカエル三世の時代だけではなく、九世紀の他の時代にも射程を広げて考察を進めていくことが筆者のこれからの課題となろう。

ミカエル三世、バシレイオス一世の時代は皇帝が高官層に対して自らの裁量権を確保し、政治の実務に関与していく努力を行なった最後の時期であった。彼らと共に、皇帝が政治の表舞台に関わっていた時代も過ぎ去っていく。彼らの時代はビザンツ帝国の政治構造・支配構造の点で、一つの画期をなしているのである。

① こうした、ミカエル三世時代の事件史の概説については、Ostrogorsky, *op. cit.*, pp. 217–232 参照。

② Haldon (1990), pp. 160–172, 388–394.

③ 根津前掲論文参照。

④ 皇帝親征はバシレイオス一世の治世後半以降激減し、レオン六世からロマノス二世（在位九五九～九六三年）に至る四代のマケドニア朝皇帝は一度も親征を行なっていない。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程

The Nobility in the Anglo-Norman Realm

NAKAMURA Atsuko

The firm relationship between medieval England and Normandy which John Le Patourel emphasized in *The Norman Empire* (1976) and other works dramatically changed the standard model of an insular medieval England. In 1066, William, Duke of Normandy led the Norman conquest of England and established the so-called "Anglo-Norman Realm." The realm consisted of two regions, one on either side of the English Channel. Had the Anglo-Norman Realm consolidated medieval England and Normandy as firmly as Le Patourel asserted? Did the two regions in fact form a single political entity?

When examining medieval realms, it is important to remember their differences from modern nations, and to keep in mind that they were founded on accumulated layers of groups of people. For this reason, it can be said that the nobility formed the top layer and thus one of the most important components of the medieval realm. By studying the nobility, we can learn about one side of the Anglo-Norman Realm.

In this paper, the auther has focused on the Anglo-Norman nobility with the intention of giving a picture of their activities as a whole, considering also the relatiobship between the nobility and the monarch. To this end, she has carried out a statistical study of chronicles and chater evidence. The auther concludes that the Anglo-Norman nobility adapted to the unique characteristics of regions within England and Normandy to form a governing class full of variety.

Michael III and the "Gefolgschaft"—The Emperor and the Ruling Structure in the Ninth-century Byzantine Empire

KOBAYASHI Isao

H.-G. Beck, the German scholar of the Byzantine Empire, explained the Byzantine social structure by using the term "Gefolgschaft (Following)." He asserted that Byzantine society had very high social

mobility, and for this reason, a stabilized ruling class could not take shape. The "Gefolgschaft" of Emperor Michael III (842-867) plays an important role in Beck's argument.

Beck's analysis has had a significant influence upon the study of Byzantine society. But his approach has its own shortcomings, some of which can be addressed with the help of more recent scholarship, like that of F. Winkelmann. In this paper, the author builds on Winkelmann's work and considers the influence of the "Gefolgschaft" upon ninth-century Byzantine social structure. This paper makes it clear that Michael III's "Gefolgschaft" consisted in fact of high-ranking officials.

Accordingly, Beck's theory that the Byzantine Empire was characterized by high social mobility does not fit the reign of Michael III. Instead, it can be seen that high-ranking officials played important political roles during Michael III's reign; these officials could even become an obstacle to an emperor who wanted to rule by his own will alone. This raises the question of how Michael III dealt with high officials and administered the empire. This paper demonstrates that in order to have his own way, Michael III constructed an extensive kinship network, within which he occupied the dominant position, and further formed a group of close associates who were high officials and were faithful to his will. Through the use of strategies, Michael III succeeded both in imposing his own administrative will and in preserving a stable ruling structure.

The Ceremony of Appointment at the Imperial Palace (*dairi ninkangi* 内裏任官儀) and the List of Appointees (*kaninjinrekimei* 可任人歴名) in Eighth and Ninth century Japan

NISHIMOTO Masahiro

The ceremony through which higher bureaucrats of the ancient court were appointed to office is called the ceremony of appointment, *ninkangi* 任官儀. With the aim of reconstructing the eighth-century version of this ceremony, Shōhachi Hayakawa has done extensive work on the relevant texts, and has proved that many parts of the documents concerning the